

# 新国際点字楽譜表記解説

## NEW INTERNATIONAL MANUAL OF BRAILLE MUSIC NOTATION

### 第1部：一般的記号

#### 目的と一般原則

- A-1 本書の目的は、1982年（モスクワ）、1987年（ドイツのマールブルク/ラーン）、1992年（スイスのザーネン）の点字楽譜会議で合意されたものを記録することです。これは、1888年、1929年、1954年の国際会議に基づいています。
- この合意のほとんどは、点字楽譜記号の意味するものに関するものです。国際的に承認された記号がここに載せられており、様々な書式がある中で、共通した適用を示しています。
- A-2 本書で示される点字楽譜記号はこれまで国際的に合意されてきており、できるだけ、地域的に発達した記号よりも使われるべきです。
- A-3 また音楽家が様々な書式の中で、ここに掲げる記号を使えるように、国際的に合意されてきています。
- A-4 点字楽譜出版者には、楽語の中の文字部分で縮小すなわち短縮形を使わないよう求められます。略語を含めた墨字用語については使われるべきです。
- A-5 「視覚障害の点字利用者のニーズを尊重し、可能な限り厳密に墨字に従うこと」は、国際的合意を可能に出来る共通の理念です。それは、ギターの手振り、コード記号と和声、現代音楽等の分野での新しい合意も含んでいます。
- この理念は、各国が楽譜点訳の表記法を国際化し、将来に向かって努力

していこうという決意を導く助けとなるでしょう。

- A-6 点字楽譜に点字記号すなわち、部分けされたパートに休符やシャープを付け加えなければならない場合、墨字楽譜には出ていないことを示すために、5の点を前に付けなければなりません。
- A-7 その国固有の記号がプラスやマイナス記号のような事項に使われる場合、その記号は出版物の最初に載せられるべきです。本書で使われている北アメリカの記号は、編集者記の第二項目に掲載されています。
- A-8 “連続”は点字楽譜で一般的に使われている工夫です。ある種のもものが連続している時、最初に現れたところで2度書き、最後に現れる前までは再度書きません。その最後のところでもう一度書き、再度連続の指定がなければその連続は終了します。
- A-9 ある特別な墨時の記号を表す点字記号は、異なった事例の中で熟考されて使われることがあります。本書に出てくる例では、墨字の親指記号はチェロを弓で弾く時に使われ、またバルトークのピッチカートにも使われます。
- 同様に、墨字上は同一でも、作曲家の意向により違うように演奏される装飾音もあります。